

呉東と呉西

——飲酒からみた女性像——

富山市民病院神経科精神科 草野 亮

はじめに

富山県の中央に標高わずか76mの呉羽山系がある。それを境にして、東側を呉東、西側を呉西と呼ばれている。目をもっと広く、日本列島全体に転じると、その低い丘陵を、関東圏と関西圏との接点とみる人もいる。

コンパクトにまとまった一つの行政単位である富山県の中にはそのような差異はないと主張する人たちもいるが、長い歴史と地理的条件の差異によって、両地域の間には、産業、生活様式、言葉、物の考え方などに若干な違いが存在すると考える。

この論文は、微細な差異を浮き彫りにするのが目的である。まず民族の母なる女性に登場願ひ、飲酒行動を指標として考察していきたい。女性をえらんだ理由は、男性に比して女性の地域移動性が低く、また移動した場合にも環境にたいする順応性が高く、その地域の生活習慣を如実にしめすのに適していると判断したからである。

調査方法

額田を班長とする文部省科学研究費総合研究「アルコール飲料の社会医学的研究」¹⁾ で用いられたアンケート方式に著者らの設問を追加したもので、これまでの私どもの報告²⁾³⁾⁴⁾と同様の方法をとった。

調査対象

呉東と呉西の両地域の女性教師を調査対象とした。すなわち、呉東の代表として富山市教育委員会管内より無作為に抽出した小・中・

高校女性教師409例と呉西の代表としての高岡市教育委員会管内の女性教師399例について比較検討を行った。両地区の調査対象数、回答数、回答率を表1に、年齢分布を表2にしめた。両地区の調査対象の年齢分布には有意の差はみられなかった。

表1. 調査対象

	例数	回答数	回答率
富山市	409	374	91.4
高岡市	399	392	98.2

表2. 年齢分布

年齢	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
20才代	107	28.6	100	25.5
30才代	88	23.5	93	23.7
40才代	126	33.7	122	31.1
50才代	38	10.2	66	16.8
未	15	4.0	11	2.8
計	374	100.0	392	99.9

図1



なお、県教育委員会によれば、富山県内は図1のごとく4地区におけられ、それぞれの地区内で勤務移動が行われる。

(註) 女性教師を調査対象にえらんだ理由は、学校教師は母集団が比較的均質でサンプリングの違いによる大きな誤差を考えなくてよいこと、I, Q, が比較的高く質問内容の把握や回答が正確で、信頼度の高いデータが得られることの2点からである。

調査結果

まず初飲年令についてみると、表3のごとく15才以下および16～17才の低年令での初飲体験が、富山の女性がかそれぞれ5.4%および2.9%で、高岡のそれ0.8%および0.4%に比べてかなり高い数字であるのが目立つ。両地区とも20才前後に初飲経験が集中しているが、18才～21才の年令域でみると、富山の74.8%に比し高岡では83.6%とやや高い。すなわち、高岡では低年令の飲酒が抑えられて、成人式前後ではじめて解除される様子が明瞭に観察される。

表3. 初飲年令

地区 年令	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
～15才	13	5.4	2	0.8
16～17才	7	2.9	1	0.4
18～19才	86	35.5	102	40.6
20～21才	95	39.3	108	43.0
22～23才	30	12.4	23	9.2
24～25才	9	3.7	9	3.6
26～27才	0	0.0	2	0.8
28才以上	2	0.8	4	1.6

飲酒のきっかけは、表4のごとく、富山では「つきあい」43.5%、「お祝い・行事」43.2

%とほぼ同様であるが、高岡ではそれぞれ、49.3%と37.4%で、「つきあい」が高く、「お祝い・行事」が低い。華やかな冠婚葬祭で名高い高岡で「お祝い・行事」の値が低い理由はあとで述べる

表4. 飲酒のきっかけ

内容	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
つきあい	115	43.5	133	49.3
お祝い・行事	114	43.2	101	37.4
仕事上	15	5.7	16	5.9
なんとなく	7	2.7	9	3.3
親のすすめ	6	2.3	4	1.5
一人前になった	3	1.1	4	1.5
その他	4	1.5	3	1.1
計	264	100.0	270	100.0

成人に達してから、なんらかの形で飲酒するもの、すなわち飲酒人口は、富山では70.1%、高岡では69.9%でほとんど差がなかった。また飲酒頻度についても、表5のごとく、両地区に差異はみられなかった。

表5. 飲酒頻度

頻度	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
毎日	0	0.0	2	0.5
週4～6	5	1.3	4	1.0
週1～3	28	7.5	25	6.4
ほとんどのまない	228	61.0	242	61.7
やめた	1	0.3	1	0.3
飲まない	112	29.9	118	30.1
計	374	100.0	392	100.0

飲酒の理由については、表6にしめしたが、「つきあい」、「たのしむ」、「疲れをなおす」、「よくねるため」の順であり、両地区の間に差がみられなかった。

しかし、女性の晩酌者について調べてみると、晩酌をするものが富山では47.2%と高く、高岡では26.8%と低かった。晩酌者の酒量は、表7のごとくで、1合以下に注目を見ると、富山の75.3%にたいし高岡は90.1%をしめし、高岡の方が酒量が少ない傾向にある。

宴会での酒量についても、表8のごとく1

合以下は富山の78.6%にたいし高岡は88.8%と高く、1～2合をみると富山の17.2%にたいし高岡は9.8%と低い。すなわち高岡の方が酒量が少ない傾向がうかがわれる。

表6. 飲酒の理由

理由	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
つきあい	163	58.4	165	60.0
たのしむ	47	16.8	47	17.1
疲れをなおす	23	8.2	23	8.4
よくねるため	21	7.5	18	6.5
元気を出す	8	2.9	6	2.2
食欲をます	4	1.4	9	3.3
苦痛をやわらげる	1	0.4	2	0.7
その他	12	4.3	5	1.8

表7. 晩酌の酒量

酒量	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
1合以下	58	75.3	46	90.1
1～2合	8	10.4	3	5.9
2～3合				
3～4合			1	2.0
その他	11	14.3	1	2.0
計	77	100.0	51	100.0

表8. 宴会での酒量

酒量	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
1合以下	169	78.6	199	88.8
1～2合	37	17.2	22	9.8
2～3合	5	2.3	1	0.4
3～4合	3	1.4	1	0.4
4～5合	1	0.5	1	0.4

酒席への出席については、「必ず出席する」、「普通に出席する」とも、表9のごとく両地区に差がみられなかったが、出席しない場合には高岡では「さける」と消極的態度が10.3%とやや高く、富山では「ことわる」と明確に答えるものが2.7%とわずかに高い傾向がうかがわれるようである。

おもに飲むアルコール飲料について調べたのが表10で、両地区ともビールが第1位で、

清酒、ウイスキー、果実酒が続いている。その順位は両地区の間で異ならないが、高岡では清酒がやや多く、富山ではウイスキーがやや多い傾向がうかがわれた。

表9. 酒席への出席

態度	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
必ず出席	3	0.9	5	1.4
普通に出席	286	86.7	304	86.6
さける	28	8.5	36	10.3
ことわる	9	2.7	6	1.7
機会なし	4	1.2	0	0.0

表10. おもに飲むアルコール飲料

種類	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
ビール	133	59.4	133	57.0
清酒	49	21.9	59	25.3
ウイスキー	31	13.8	26	11.2
果実酒	6	2.7	3	1.3
その他	5	2.2	12	5.2
計	224	100.0	233	100.0

表11. 飲酒場所

場所	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
自宅	98	41.9	107	41.9
のみや	39	16.7	38	14.8
友人宅	5	2.1	8	3.1
その他	92	39.3	103	40.2
計	234	100.0	256	100.0

表12. 酒の上の失敗

失敗例	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
他人に迷惑	13	5.0	8	2.9
けんか	2	0.8	-	-
その他	16	6.1	3	1.1
計	31	11.8	11	4.0
回答数	262	100.0	274	100.0

おもに飲む場所については、表11のごとく、両地区とも自宅、のみや、友人宅の順で、両者のあいだにほとんど差がみられなかった。

酒の上の失敗については、表12のごとく、なんらかの形で失敗をしたことのあるものは

富山11.8%、高岡4.0%で、富山の方が断然多い。内訳をみると、いずれも他人に迷惑をかけたものも多かった。

ここで、がらりと質問を変えて、アルコール中毒者を見たことがあるかという問いに、「ある」と答えたものが、表13のごとく、富山33.1%、高岡33.2%とほぼ同数であった。富山も高岡も巷を歩くアル中者の数は変わらないのかも知れない。

表13. アル中者を見たことがあるか

経験	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
ある	120	33.1	123	33.2
ない	203	55.9	200	54.1
わからない	40	11.0	47	12.7

アル中者を見たときの気持ちについて問うと、表14のような結果をしめした。両地区の差異をみると、高岡では「おそろしい」がやや高く、富山では「気持ちわるい」がやや高い傾向がうかがわれた。

表14. アル中者を見たときの気持ち

気持ち	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
かわいそう	53	40.2	55	41.4
おそろしい	50	37.9	56	42.1
気持ち悪い	24	18.2	17	12.8
こちらも愉快になる	2	1.5	4	3.0
その他	3	2.3	1	0.8

「アルコール中毒とは」という質問には、表15にしめされたような回答が寄せられたが、両地区の差異をみると、富山では「社会の落伍者」がやや高く、高岡では「内臓を悪くした人」がやや高い傾向がうかがわれた。

つぎに、アルコール中毒予防のために学校における酒害教育の必要性について問うと、表16のごとくで、両地区の比較では、富山が必要に、高岡が不必要に、やや高い傾向がうかがわれた。

最後に、酒は人生に必要なかとの問いに答えた結果は表17のごとくで、「必要」と「ときに

必要」とを合わせると、富山82.4%にたいし高岡は83.9%で、「不必要」では富山の5.6%にたいし高岡は3.2%とやや少なかった。

表15. アルコール中毒とは

地区	富山市		高岡市		
	例数	%	例数	%	
アルコール中毒とは	酒をやめられぬ人	220	53.3	224	54.5
	社会の落伍者	67	16.3	57	13.9
	精神病	57	13.8	55	13.4
	酒ぐせの悪い人	42	10.2	40	9.7
	内臓を悪くした人	13	3.2	21	5.1
	毎日飲酒する人	13	3.2	14	3.4
計	412	100.0	411	100.0	

表16. 学校における酒害教育について

地区	富山市		高岡市	
	例数	%	例数	%
必要	103	46.8	162	43.8
不必要	65	29.5	127	34.3
わからない	52	23.6	81	21.9

表17. 酒は人生に必要なか

地区	富山市		高岡市		
	例数	%	例数	%	
酒は人生に必要なか	必要	25	7.3	35	9.4
	時に必要	268	75.1	277	74.5
	不必要	20	5.6	12	3.2
	わからない	43	12.0	48	12.9

考 察

近世になって、越中は加賀藩の支配下となった。富山市を中心とした婦負郡、新川郡の一部の地域は、加賀藩の支藩である十万石の富山藩が治めた。加賀藩の農政制度の特色といわれる「改作法」があるが、それは全県民を藩主の農奴として働かせる方法で、それによって藩財政の増収をはかった。富山藩は、神通川と常願寺川の扇状地に発達したが、度重なるこの川の氾らんで、農民達は苦しめられた。洪水や凶作や、藩のきびしい取り立てで、農民達はいつも貧乏であった。そこから、忍耐強く、勤儉節約の気風が生まれたのだといわれる。また藩は、乏しい藩財政を支えるために全国を相手に売薬を振興した。これは、他国との知識や交流を盛んにさせ、進取の気

性を生んだ⁵⁾

同じ越中でも、加賀藩の支藩である富山藩の領土であった富山地区と、加賀藩の直接支配を受けた高岡地方とは、微妙な違いをみせる。

加賀藩は、高岡の商人に領内の特産物の取り引きを独占させ手厚く保護したため、江戸時代から明治時代にかけて商工業の中心として繁栄した。庄川、小矢部川流域のいわゆる呉西平野は、急峻な立山連峰から流れ落ちる呉東地方の暴れ川にくらべ、ゆったりとしたひろがりを見せ、地質も肥沃である。穀倉地帯の砺波平野を背後に持ち、天然の良港伏木港をもつ高岡は、商都としていよいよ発展して行ったのである。加賀藩は高岡の庶民に祭りを奨励した。前田利長は父利家が太閤からもらった聚楽第の御所車を町に与え、京都の祇園祭にならい、関野神社の祭礼に曳きまわさせた。これが高岡の御車山祭りである⁶⁾。

この両地区の間にあるのが呉羽山で、その東側を呉東、西側を呉西と呼んでおり、呉東の代表が富山、呉西の代表が高岡ということになる。埼玉大の岡崎勝世は⁷⁾、「高い山ではないが、呉羽山というのが富山県のほぼ中央にあって、県を二分しています。これを境に呉東と呉西というんですが、富山・魚津は呉東、高岡は呉西に入ります。この両地域間のライバル意識が激しい。呉西は加賀藩の分家意識が強く、文化面でのプライドがあり、呉東はこっちが本当の富山だという反発があるのです。工場設置の場所とか県知事をどちらにするか、よく争われて来ました」と述べている。

呉羽山を境に、関東と関西の文化圏がその影響を分けあっているという見方もある。味覚をとってみれば、呉東が濃い目、呉西が薄味、呉東がそばで、呉西がうどんを好む。風習にも違いがあり、冠婚葬祭は、呉東がどちらかというと簡素、呉西では華美で伝統的な儀式が強く守り伝えられている。呉西は風習

を大事にし、土着志向が強く、万事物入りであるのに反し、呉東は都会的、合理的で伝統にとらわれない生き方がみられるという⁵⁾。ことばについてみると、関西弁は商売用語あるいは折衝用語といわれる。お互いに顔を合わせると「もうかるけ」「なーん、もうからんちゃ」。一つの流れができて、交渉ごとがうまく行くという。これが高岡の言葉である。関東弁は、他人との対話とか交渉が念頭にない自己表現用語といわれる⁷⁾。樋口清之は、富山県人を評して、「強気で抵抗心があり、また孤立的で自分自身を理解させようと努めないため敵をつくりやすい」と述べているが⁶⁾、これは富山を中心とする呉東の気質に近い。呉東のことばは、お世辞を知らないという関東弁の自己表現用語に近い。

昭和55年に富山県生涯教育班が、県民大学夏季講座受講者に「生きがい」についてアンケート調査を行ったことがある。その結果は表18のごとくで、富山市の受講者は、生きがいの第1位が「趣味」、第2位が「仕事」、第3位が「家庭の幸福」であった。ところが、高岡市の受講者のそれは、第1位が「家庭の幸福」で、第2位が「仕事」、第3位が「趣味」という風に異なっていた。

表18. 「生きがい」について

地区 生きがい	富 山 市		高 岡 市	
	例 数	%	例 数	%
趣 味	344	68.9	223	48.0
仕 事	323	64.7	284	61.1
家庭の幸福	294	58.9	336	72.3
友 情	153	30.7	—	—
社会奉仕	131	26.3	160	34.4
子 ども	125	25.1	129	27.7
信 仰	73	14.6	58	12.5

富山県生涯教育班調(昭和55年)

高瀬重雄は、立山信仰について「高い山の頂上に至るとき、人ははじめて弥陀の来迎にあうことができる。したがって、山中にこそ永遠の極楽世界が展開していると信じられた。そして、地獄と極楽とを結んで、切苦を去り

安養の浄土に到達させるのは、地獄や観音などの菩薩信仰であって、地獄の亡霊が極楽に往生するには、はるかな山の頂に登って、来迎を拝さなければならないと考えられた。往生はすなわち登退であり、往登であるとされたゆえんであろう。登退のために、道なきところに道を開くこと、すなわち開山ということ……」⁸⁾と述べている。呉東の農民たちは、立山連峰から流れ落ちる天井川との斗いの連続であった。営々として築きあげた幸せを、洪水が一瞬にして奪い去った。乏しい作物は、藩のきびしい取り立てにあった。まさに苦難と忍従の連続であった。朝な夕なに見る神々しい立山に極楽浄土の夢を託したのは当然のことであったであろう。そのころの延長線上に、現代人の生きがいとしての「趣味」志向があるといえないであろうか。それは呉東地域の人々の心を映して面白くと思われる。

呉西の高岡は、豊かな土地を後背地に持ち、加賀藩領に含まれていた。江戸時代初めに高岡城が廃城となってからは、商業の都として町民文化が発展し、前田利長が豊臣秀吉からいただいたという御車山を繰り出す曳山祭りに町民は酔い、華やかな冠婚葬祭を行うところとして現在に至った⁹⁾。高岡町民は人間を愛し、家庭を大事にした。生きがいを高踏的なものに求めず、世俗的で、現実的な家庭に求めた。それは、呉東の農民達に比べ、豊かであったからに他ならない。

表19. 家持ち家等の比較(富山:高岡)

内容	地区	富山市	高岡市
持ち家比率(S55)%		74.0	<85.1
一世帯あたり部屋数(S55)		5.37	< 6.14
一人当たり畳数(S55)		10.3	< 11.0
水洗便所普及率(S56)%		46.0	< 48.1
テレビ放送受信契約件数(S56) 100世帯当たり		88.9	< 95.6
固定資産税負担額(S56) 人口1人当たり 円		26,566	<30,439

現在、そのように家庭を大事にする高岡市民は、富山県総務部の統計調査によると¹⁰⁾、表19のごとく、持ち家率、一世帯当たり部屋数、一人当たり畳数、水洗便所普及率、テレビ放送受信契約件数、固定資産税負担額のいずれも、富山市を凌駕している。そして、家庭を大事にする高岡人は、表20のごとく、一世帯当たり人員、高令者のいる世帯比率も高い。すなわち核家族が少ないのである。これ

表20. 一世帯当りの人数と、高令者のいる世帯率

	富山市	高岡市
一世帯当たり人員(S55)人	3.47	<3.81
高令者のいる世帯比率(S55)%	26.3	<31.9

が私どもの調査の初飲年令に示唆を与える。高岡市の女性に若年令の初飲が低率であったのは、このことと関係があるであろう。すなわち、高令者のいる家庭では、子女の若年での飲酒を抑える傾向にあるのである。初飲年令に関して、もう一つのファクターもある。最大の外様大名である前田藩の加賀百万石では、文化の主役は町人ではなく士族であった。加賀へ行くと天から謡曲が降ってくるといわれるように、屋根ふき、植木職人までが謡の一節を口ずさんだが、それも能楽をたしなみとしていた武士の影響であるという⁶⁾。金沢城内に設けられた細工所で、金工や染色や漆工が奨励された。それが九谷焼や加賀友禅や輪島塗となった。文化をたしなむ武士の奥方は上品で貞淑でなければならなかった。高岡の女性が金沢の女性を理想像としたのはけだし当然であろう。すなわち、子女のしつけや教育が厳しく、その影響を、私どもが調査した結果の、若年女子の飲酒の抑制にみるような気がする。「飲酒のきっかけ」をみても、華やかな冠婚葬祭で知られる高岡地区の方が、「お祝い・行事」の比率がかえって富山地区よりも低いのは上述の理由のためであろう。飲酒人口や飾酒頻度については、両地区に差異がなかったが、女性晩酌率は富山地区の47.2%にたいし、高岡地区は26.8%と非常に低く、ま

た晩酌や宴会での飲酒量について比較しても高岡の方が少なかったことは、やはり上述の理由に一致すると思われる。明治4年に廃藩置県となり、富山県の県庁所在地が富山市におかれ、一応の行政機構が完成した後も、高岡の庶民の生活の目はこれまでの歴史の影響を受け、金沢の方に向かうことが多かった。それは高岡の教育、文化、芸能の面でもその名残を今でもうかがい知ることができる。つい最近まで、医療面でも呉西地域の人々には金沢への流れがあった。

話題を変えよう。大正7年に全国的に有名な米騒動が起こったのは呉東地区であった。魚津の漁師の女房たちが、海辺に集ったのがことのはじまりで、ついで岩瀬、泊、水橋の女房たちが地主宅に押しかけて、米の安売りを要求した。この騒動がさらに、滑川、生地、石田、宮崎、四方、富山、上市、高岡、石動へと広がって行ったという⁹⁾。これを見ると震源地も呉東なら、騒動のおもな舞台も呉東であったことがわかる。呉東の女性のかなり積極的気性を感じさせる。私どもの調査でも、酒席への出席ができないとき、富山の女性ははっきりと「ことわる」方がやや多く、高岡の女性は、前述した金沢文化の洗礼を受けて、おしとやかに「避ける」方がやや多い。この高岡女性が、日本古来の伝統的な清酒を好む傾向が富山よりわずかに多い傾向と、富山ではそれにたいし、近代化・都会化の指標といわれるウイスキー飲酒者がわずかに多いという傾向も歴史的事実などから理解できるように思われる。

「酒の上の失敗」をみると、富山の女性が高岡よりもはるかに多いのは、富山の飲酒量が晩酌・宴会ともに多いという理由の他に、前述のごとく、米騒動の発生地である富山の女性の積極性と加賀文化に染まった高岡女性の貞淑性との関係がだろうか。この傾向は、アルコール中毒者を見た感じにもうかがわれ、富山の女性は「気持がわるい」が高岡より多

く、高岡の女性は「おそろしい」が富山よりやや多かった。富山の積極的気質(?)と高岡の消極的気質(?)の差であろうか。

アルコール中毒者をどのように見るかという姿勢にも差がみられ、富山の女性では「社会の落伍者」が高岡よりやや多く、やや上から見る姿勢にたいし高岡の女性では「内臓を悪くした人」と同情的にみる傾向が富山よりやや多かった。

アルコール中毒を予防するための酒害教育を学校で行う必要があるという積極組は富山にやや多く、不必要であるという消極組が高岡にやや多かったのは、飲酒量の多い富山と少ない高岡女性の差の他に、前述の歴史的背景から由来する両地区の気質の差も考慮に入れなければならないであろう。

最後に、「酒は人生に必要なか」という問いに、両地区とも「必要」あるいは「ときに必要」と答えたものが80%以上の高い値をしめしたが、飲酒量の少ない高岡女性がより必要性を感じている印象を受けたのは、冠婚葬祭や人のつきあいの深さなどその地域特性の表現と考えられた。

個人の飲酒行動が、その人のパーソナリティと関係があるように、地域の人々の飲酒様態が、地理的・歴史的・社会的条件などさまざまな要因をふくむ総体としてのその地域性(地域的性格)とかかわりがあることを考え合わせると、非常に興味のあることである。

ま と め

1. 高岡の女性は、富山に比し、若年者の飲酒が抑制されている。
2. 飲酒のきっかけを「お祝い・行事」とするものが、冠婚葬祭の華やかな高岡は、富山よりむしろ低い。
3. 女性晩酌率は、富山の方が高岡より高い。
4. 晩酌および宴会での飲酒量は、富山が高岡より多い。
5. 伝統因子の清酒飲用傾向は高岡でより高

く、洋風化因子のウイスキーは富山でより高い傾向がうかがわれる。

6. 酒の上の失敗は、富山が高岡より多い。
7. 富山の女性がより積極性・能動性をしめすのにたいし、高岡の女性はより消極性・受動性をしめす傾向がみられる。
8. 地域の人々の飲酒様態が、歴史的・地理的要因を含む地域性とかかわりがあることが示唆された。

おわりに、本調査の統計処理に協力下さった富山市民病院山野俊一学士、およびいろいろの面で御指導いただいた富山県教育委員会稲葉茂樹氏に深謝致します。

さらに、富山市ならびに高岡市教育委員会に並々ならぬ御協力をいただいたことをここに記して深く感謝の意を表します。

文 献

- 1) 額田 繁：アルコール中毒の疫学，加藤伸勝・大原健士郎・河野裕明編：アルコール中毒，18～44，医学書院，1973。
- 2) 草野 亮，柴美喜子，中川秀幸：富山県の飲酒を考える，富山県農村医学会誌，13：52～62，1982。
- 3) 草野 亮，中川秀幸：富山県民の飲酒実態調査——一般成人男性の場合——，とやま県医報No.848：12～18，1983。
- 4) 草野 亮，山野俊一，中川秀幸，柴美喜子：富山県女性の飲酒状況について，富山県農村医学会誌，14：69～78，1983。
- 5) 北日本新聞社編：各駅停車全国歴史散歩富山県，河出書房新社，1981。
- 6) 日刊ゲンタイ編集部：県民性と相性，グリーンアロー社，1981。
- 7) 河出書房新社編：県別日本人気質，河出書房新社，1983。
- 8) 高瀬重雄：立山信仰の歴史と文化，名著出版，1981。
- 9) 富山県史編纂委員会編：富山県の歴史と文化，青林書院新社，1963。
- 10) 富山県総務部統計情報課編：100の指標・統計からみた富山，昭和58年版，1983。